

関西農業史研究会報

No.6 1979.7.18

第19回例会. 6月9日 内田和義氏

「近世中後期北関東における 一農民の思想—杉山家家訓の分析—」

第19回例会は上記の要綱で開かれ、8名が参加した。以下はその報告要旨である。(念報が遅れたことをお詫びします。)

【I】 近世における農民の思想を解明するひとつの手掛りとして、本報告では18世紀後半に下総国豊田郡貝谷村で杉山頼兵衛彬義によって書かれた「杉山家家訓」の分析を行った。

家訓が書かれたのは、社会経済史の力で「宝暦・天明期」と特別に呼称される変動期で関東において農村の荒廃化が進む時期である。彬義は、自分達をとりまく状況が非常に厳しいものだとこのことを鋭く認識しており、執筆の動機は、家の没落・村崩壊の危機意識であった。そして執筆の目的は、危機に対応するために、彬義がごまごまな経験から獲得した「彼是」を「採集」め、「愚案」「愚意」を「書記」して息子の彬映に与えるためであった。

では、困難な状況への対応策とはどのようなものであったろうか。まず彬義は人間にとって心が最も根元的なものであるとする。そのため人間は心を修める必要があるとする。心を修めるには個人道徳の実践、具体的に言えば「堪忍」「智仁勇」「信」「慈」「慈悲心」「忠」「義」「孝」といった諸徳目の実践が必要だとするのである。

「慈」「慈悲心」は仏教概念であるが、他は儒教的概念である。まず「慈」については、親が子を、祖父が孫を思う心のようなものだと述べている。そしてこのような意味を持つ「慈」の心で、名主は村人に接しなさいと説いている。すなわち、「慈」は、村

の支配者としての名主が、村人に接する際のひとつの実践倫理として説かれている。「杉山家家訓」を一読するなら、柳義が朱子学の影響を受けていたことは明らかであり、したがって支配者としての根本倫理が「仁」にあるということは、柳義の熟知するところであったと思われる。しかし、それにもかかわらず、村の支配者としての実践倫理を「仁」ではなく「慈」に求めているのである。この二つの概念は、表面上、その意味内容が非常に似ていながらも、その背景には大きな差が存在していた。すなわち、「仁」が封建領主の暴力を背景とした支配者としての実践倫理であるのに対し、「慈」は伝統的構成員に基づく家父長的支配者の実践倫理として、柳義は説いていると思われる。

「堪忍」は、「大事」に備える徳目として説かれている。

「智仁勇」(三徳)は、杯羅山のような朱子学者が説く意味とほとんど同じ意味で説かれており、柳義が朱子学イデオロギーの影響を受けていたことが知られる。

「忠」と「義」は、柳義においてはそれほど重視されていない。「忠」は「臣」の「君」に対する倫理であるし、「義」は支配者が被支配者に一方的に押しつけてくる倫理であって、農民が主体的に実践すべき徳目ではないからだと思われる。

「孝」は、柳義においても重要な徳目だとしている。「孝なればとうぜん勤勉であるべきであり、勤勉なればとうぜん家が栄えることになる」からである。高尾一彦氏の説によれば、近世における農民は「孝」を最も重要な徳目とした。「家」の維持が第一と考えられていた時代では、もっともなことだと思われる。しかし、柳義が最も重要な徳目としたのは「孝」ではなく、「信」であった。「信」は共同体成員間の団結の倫理として説かれた。

状況への対応のための修身の内容としては、修心と共に、学問・剣術の実践も説かれている。

【II】上述のように、諸徳目の実践ならびに学問・剣術の習得によって修身が可能になると、次の課題は、家の没落・村の崩壊の危機への具体的対応、すなわち齊家治村はいかに果たすべきかになる。

まず、博奕の禁止、大酒大食の戒しめである。ただし領主の触のように、酒の禁止や、粗食を説いているわけではない。また生命の尊重を説いているが、この背景には、間引の流行という悲劇

な状況があった。

さらに、農民の直接の支配者である代官や（貝谷村は柳義の時代には天領）、その手代への接し方についても言及している。彼は、権力に対してはたゞ従順であるように説いている。しかし、これは権力あるいはその手先を絶対視し、超越的存在とみなしていたからではない。彼らの気をそとねると自分の、村の損となるからであり、従順にして彼らの気にかかるようにいるまうと自分達の益となるからである。有名な、「長いものには巻かれろ」といった、被支配者としてのしたたかさがあつたかたがめれるのである。

ある不作の年、当時の代官であった「小林孫四郎政用」が減免を許してくれろと、彼はそれに感謝して「政用神社」を建立し、毎年十月十九日に神楽を奉納した。これは「小林孫四郎政用」の仁政に村人全員が毎年感謝するという意味とともに、代官の代官に対して、暗黙の内に仁政を要求するデモンストレーション効果をも持っていたとも言えよう。

柳義のこうした「したたかさ」というものは、例えば明和二年の「日光山法会え節」に下役として召し出され、「手代=被仰付其上檢便被仰付」で、「甚めいれくはいたしい」とするような権力観に基いたものであろう。幕藩体制の頂点に立つ徳川家の惣事に、たとえ天領代官の下役とはいえ、召し出されて役目を勤めることを「光栄」であるとは考えず、むしろ「めいれくなことである」としているのである。ここには、柳義が、徳川家という絶対的権力を頂点とする幕藩体制という共同の型から解放される可能性さえ見出さぬものである。これは、彼が地主として幕藩体制を最末端から支える役割を果たしながらも、基本的には自らを被支配階級の側におき、朱子学イデオロギーの強い影響を受けながらも、自らの思想を農民としての生活の場で鍛えながらこぞであったと思われる。

さらに農村荒廃への対応策としていくつかのことがあげられていすが、最も重要だとしているのは、村=共同体の団結であった。柳義の理想とする村=共同体とは、村内の者が杉山家を中心にして日々睦しく暮らさうなものであった。そのような共同体世界を維持するために「信」が説かれたのである。

しかし、現実には、農村荒廃という変動期であり、村落共同体は大きく動揺していた。農民下層を中心に没落離村するものと、凶凶時に乗じて土地を集積し、富を蓄積するものがあつた。彼らは経済力を背景に、村内の諸権利を独占する旧来の支配層と対立を深めるようになっていた。このような新興の有力小前

層と草分百姓を中心とする旧来の支配層との対決は、いわゆる開方運動となつてあらわれた。こうした状況こそが、貝谷村の家父長的支配者杉山家の最大の危機と、林義には意識されたのである。その故に、彼は「信」を説き、村=共同体の国語を最も強調したのである。

[Ⅲ]最後に杉山林義の思想が、近世の思想状況の中でのどのような特徴を帯びていたかを概観しておこう。

当家訓では、当主の実践目標は、一言で言えば「修身齊家治村」である。これは朱子学が為政者の実践目標とする「修身齊家治國平天下」の小型版とも言えよう。これは個人道徳と政治、すなわち「私」と「公」が連続する思惟様式である。林義の思想は、こうした思惟様式のみならず、使用概念においても朱子学の影響を受けていた。しかし、「慈」を村の統治者の実践倫理とする点、ならびに謙徳日の内で「信」を最も重要とする点で朱子学と異なっていた。また朱子学では、仏教を強く排除するものであるが、林義は神・儒・仏を平列同価値のものとして受容している。このように、エまがまな思想を自己の経験の中に摂取し生かすという立場において、石門心学の思想と共通している。しかし心学の教義の中心が、勤勉・儉約・正直といったいわゆる「通俗道徳」であるのに対し、当家訓ではそのようなものは説かれていない。思想の形成のされ方が同じなのに、心学の教義の中心が「通俗道徳」となり、林義においては儒・仏的徳目が中心となつたのは何故であるうか。この説明は今後の課題としたい。

また儒教や仏教が民衆に対して、「貧賤・富貴ハミ天命也」とか、「此世のよしあしは過去よりの因縁に任せて」などと運命論・宿命論を説くのに対し、林義は人間には無限の可能性があると説いている。それは主として唯心論的であるが、「信」をもたえて努力するならば、「悪邪ハ不拂して不來萬善ハ不招して來り集う家運長榮子孫萬々世ならん」とするものである。支配的思想が民衆に対して支配者に都合のよい宿命論・運命論を説くのに対して、庶民林義は、唯心論を基礎として人間の主体的努力を強調し、宿命論・運命論を打破し、人間の限りない可能性(経済的場に限られたものではあるが)を説くのである。ここには、まさに「能動性と主体性の哲学」が展開されていると言えよう。

討論された項目だけ記すと、①農村荒廃という社会経済的背景と、林義の思想の形成との関連について。心学との比較。林義の思想の特質と一般性について。②①と関係して、同じ関東の「農業自得」手との時代的比較や、「河内屋可正旧記」等との地域的比較をすれば、更に林義の思想の特徴が明らかになるのでは。③杉山家は、村の中での家父長的指導者ということだが、それを「農民」の思想と考えることについて。